

第2回 ミニコローク開催記録

東北都市学会

【開催要項】

日時：2008年12月13日(土) 15:00～

場所：弘前大学地域社会研究科演習室

タイトル：「祭事文化の持続可能性
ねぶた・ねぶたの文化資源的側面から」

報告者：三浦 俊一 会員

(弘前大学地域社会研究科博士課程)

参加：7名

【報告主旨】

祭事文化としてのねぶた・ねぶたの諸価値のうち、とくに文化資源としての価値とその世代継承性に焦点をあてた詳細なフィールドワークによる報告。

従来のような観光資源や教育資源、あるいはコミュニティ形成の資源としての位置づけを相対化しながら、研究者で絵師である氏の視点から、ルーツの遡及と真正性の追求を放棄しない正統的伝承のあり方が語られた。

歴史的背景の紹介に始まり、文化財指定を受けるなかでねぶたとねぶた、そして地域間のイメージの差異が再生産されていく過程が様式の解説とともに検討された。

あわせて、参加団体への悉皆的な聞き取り調査の成果も敷衍され、今日弘前のねぶたを支えるクラブ・サークル型団体の特徴的な集合性について論じられた。

今後の展望として、調査の継続と団体の持続可能な運営にかんするマネジメント論への関心が示された。

【質疑応答】

「持続可能性」が必ずしも十分に論じられていないのではないか、伝承の「対象 = 伝えるもの」と「様式 = 伝え方」の問題を区別する必要がある、との指摘が寄せられた。

これに対して、報告者からは、伝承の対象は統合に向かい、伝承の様式は多様性を担保する、というあり方が持続可能性の要件であろうとの応答がなされた。

また、観光資源なら観光客向け、教育資源なら学生向け、コミュニティ形成の資源ならば住民向け、という具合に誰にあてた資源かが明確であるのに対し、文化資源はそれが曖昧ではないかとの指摘がなされた。

報告者からは、祭事文化のベネフィットについて、集客や地域経済への還元を挙げると、観光の議論に回収されてしまうので、慎重に吟味したい旨の応答がなされた。

さらに、文化資源として経済的な基盤を欠いては議論できないのではないかと、参加団体の組織母体にかんして地縁集団、企業組合、関心集団などと類型化し、組織論を展開したら面白いのではないかと、などの指摘もなされた。

報告者の応答はいずれもフィールドの経験的な地平から語り起こされるもので、ねぶたの知られざる側面への関心を誘い、会はたいへん盛況であった。

* その後は、弘前中心市街に移動して打ち上げを行い、自然の恵みに一同舌鼓を打って、散会となった。

書記：高橋 雅也(福島高専)